

復興を歩む

vol.32

赤蜻祭 せきしよまつり

11月4日、福島市飯野町にある飯館中学校の仮設体育館で、恒例の文化祭「赤蜻祭(せきしよまつり)」が行われました。来年度から村内の校舎で学校が再開されるため、この体育館での「赤蜻祭」は、今回が最後です。

東日本大震災を経験したのは、現在の3年生が小学2年生の学年末。川俣中学校の一部をお借りして新年度を迎え、平成24年度からは仮設校舎で学んできた生徒たちです。

今年の赤蜻祭は、村の公式キャラクター「イイタネちゃん」の架空の兄弟「イイハナ」「イイメ」「イイネ」に扮した生徒たちが、発表をつないでストーリー仕立てに進行。避難の中で育んできたふるさとへの愛着を、自然体で表現しました。

「ふるさと学習」の発表も充実しました。継続して取り組んできた「田植え踊り」は、今年新たに「小宮の田植え踊り」と、先輩から後輩へつないできた「飯樋町の田植え踊り」を、それぞれに正装で披露。集大成ともいえる発表で盛んに拍手を浴びました。

また、「母校」となった仮設校舎を模型で表現したり、村民が回答したアンケートの結果を分析したり、ふるさとへの思いを替え歌で歌い上げたり。映像やTV番組のパロディーを挿入するなどして、楽しい演出にもこだわりました。そして、全校生徒で暗唱した、宮沢賢治作「生徒諸君に寄せる」も圧巻でした。「むしろ諸君よ 更にあらたな正しい世界をつくれ」と高らかに声を張る群読は、生徒たちの決意のように響いて、観客の胸を震わせました。

フィナーレを迎え、生徒の1人は「村の新校舎で再スタートを切るためにも、これまでの恩返しをしたい」と語りました。頭上高く割られたくす玉からは、紙吹雪と共に「大成功!」の垂れ幕。会場は、一瞬に響き合った時間の熱気と余韻に包まれました。



気迫に満ちた演奏で会場を圧倒した特設和太鼓部。躍動的なバチさばきに熱い思いがほとばしります。今年のスローガン「響き合っていこう」を体現するような瞬間でした。多彩な発表の一つひとつに生徒の思いや絆の強さが表れていて、仮設校舎で積み重ねられてきた時間がここに結実したかのような素晴らしい赤蜻祭となりました。